

目次

目次	i
図表・写真・資料番号一覧	vii
ヌエル語の表記について	ix
関連用語	x
スーダン地域の地図	xiii
南スーダンの地図と調査地	xiv
第1章 序論	1
1.1. 「エ・クウォス」とヌエルの予言	1
1.1.1. 研究の背景	1
1.1.2. 「予言」とは	2
1.1.3. ヌエルの「予言」の語り口	4
1.1.4. 予言を「知っている」とは	7
1.2. 予言と社会変動	8
1.2.1. 開かれた共同体へ	8
1.2.2. 還元論的アプローチ	9
1.2.3. 多元的近代論	10
1.2.4. モラル・コミュニティ論の再生	11
1.2.5. 「モラル」という語と概念	14
1.3. 本論の視座——モラル・イマジネーション	15
1.4. 調査地の概要	18
1.4.1. 南スーダン共和国	18
1.4.2. 今日のヌエル社会	19
1.4.3. 南スーダンにおける「民族」	21
1.4.4. ヌエル社会の区分	23
1.4.5. 各調査地の特徴	24
1.4.6. 調査方法	27
1.5. 本論の構成	29
第I部 <u>ヌエルの予言者の歴史的生成過程</u>	31
第2章 <u>クジュール／予言者の成立</u>	33

2.1.	はじめに	33
2.1.1.	植民地統治と「予言者」	33
2.1.2.	本章のねらい	35
2.2.	マフディーの反乱からヌエル社会の統治	35
2.2.1.	マフディーの反乱	35
2.2.2.	ヌエル社会の統治へ	37
2.2.3.	懲罰パトロールと行政官	38
2.3.	行政官ウィリスのコミュニティ建設	41
2.3.1.	行政官とヌエルの「クジュール」	41
2.3.2.	行政官ストウルベとウィリス	43
2.3.3.	「ヌエル・セトウルメント」	44
2.3.4.	1927年のウィリスの提案書	46
2.4.	亡霊との対峙	48
2.4.1.	ウィリスの戦略	48
2.4.2.	「クジュール」の外来性の強調	48
2.4.3.	「クジュール」の性格規定	50
2.4.4.	想像力の共有	52
2.4.5.	想像力の衝突	53
2.5.	もう一つの想像力——ヌエルの人びとの解釈	54
2.5.1.	「クジュール」のうかがい知れなさ	54
2.5.2.	ビメロルのウシと神性の所在	55
2.6.	想像力の範型	58
2.7.	小括	60
第3章	内戦、予言者、予言	63
3.1.	はじめに	63
3.1.1.	内戦の開始とスーダンの独立	63
3.1.2.	紛争、国家と宗教的職能者	63
3.2.	第一次・第二次スーダン内戦とヌエル社会	65
3.2.1.	紛争と想像力	65
3.2.2.	第一次スーダン内戦	66
3.2.3.	第二次スーダン内戦の開始	67
3.2.4.	SPLAの内部分裂から「民族紛争」へ	67
3.2.5.	レイディングの変化とその利用	68
3.2.6.	第二次内戦期のヌエル内の武力衝突	70
3.2.7.	平和構築の試み	70

3.3. 内戦中の予言者の動き	71
3.3.1. 第一次内戦から第二次内戦初期：ゴニィ・ユット他	71
3.3.2. SPLA の内部分裂以降：ウットニャン・ガトケック他	72
3.3.3. 予言者の影響力	74
3.4. 内戦、平和構築、開発と予言	76
3.4.1. 予言者と過去の予言	76
3.4.2. 開発援助と予言者	78
3.4.3. キリスト教の普及と予言者	79
3.4.4. 開発／援助到来の予言	80
3.5. 政治家と予言	81
3.5.1. ジョン・ガランの死の予言	81
3.5.2. リヤク・マチャールと予言	82
3.5.3. 予言とスーダンの「近代」	84
3.6. 複数の勢力、予言者と想像力	85
3.7. 小括	86
第Ⅱ部 経験の配位	89
第4章 多産と時間	91
4.1. はじめに	91
4.1.1. 人びとの「日常」へ	91
4.1.2. 近代多元的モラル・コミュニティ論	92
4.2. ヌエル社会のモラル・コミュニティ——チエンとソク・ドウイル	94
4.3. 「終わらない」交換媒体の重要性	96
4.3.1. カネの到来	96
4.3.2. ウシを失った人びとのヴィジョン	97
4.3.3. ウシとカネの脆弱性の克服——「書くこと」の多産さ	99
4.3.4. 人間の生と連動するウシ・カネ・教育の循環	103
4.4. 「食べ物」の交換と関係構築	104
4.4.1. 「食べ物」、「書くこと」と「強さ」	104
4.4.2. IDP キャンプにおける食糧の交換	106
4.4.3. 「食べ物」と「終わる」関係	109
4.5. 他者と共に出会う祖先たち	112
4.6. 自己の不滅性と「血」の問題の解決	119
4.7. 「女の仕事」	122
4.7.1. ゴルをめぐる争い	122
4.7.2. ムルを持つ、ムルが「終わる」	124

4.8.	「タウンに住むヌエルはいない」	126
4.9.	小括	128
第5章	不妊と予言	131
5.1.	はじめに	131
5.1.1.	接合・相互作用論的モラル・コミュニティ論	131
5.1.2.	本章のねらい	132
5.2.	真実を語る狂人	133
5.2.1.	人糞喰らいから予言者へ	133
5.2.2.	ングンデンの歌	134
5.2.3.	狂人としてのングンデン	136
5.3.	複製技術時代の予言の歌	137
5.3.1.	ヌエル社会と歌	137
5.3.2.	近代メディアと予言	138
5.3.3.	「ングンデン」の写真	141
5.4.	ングンデン教会の歴史と実践	142
5.4.1.	キリスト教の浸透と神性の混淆	142
5.4.2.	国外難民の「宗教」	143
5.4.3.	キリスト教教会の実践との関わり	144
5.4.4.	ングンデン教会の多様性と特徴	145
5.4.5.	ボーのングンデン教会の歴史	148
5.4.6.	「ングンデン聖書」	150
5.4.7.	加入儀礼	151
5.4.8.	定期的な供犠	151
5.4.9.	ブク・マン・デンの祈り	151
5.4.10.	「第三の日」の祈り	152
5.4.11.	キリスト教徒との関係	155
5.5.	祖先たちの「過ち」	156
5.6.	メイ・ダンの日々の到来	158
5.6.1.	説教からみる「予言の成就」	158
5.6.2.	現在を侵食する祖先の過ち	168
5.6.3.	2つのグアースである「未来」	171
5.7.	「不妊の疑いのある身体」の回復	174
5.7.1.	「奇跡」の経験と改宗	174
5.7.2.	「不妊の疑いのある身体」とングンデン	175
5.8.	人間のパッシオネスと働きかけられる経験の対象化	177

5.8.1.	名付け	177
5.8.2.	泥山の製作	180
5.8.3.	パッシオネス	181
5.9.	小括	182
第Ⅲ部	「エ・クウォス」の変動	185
第6章	「予言の成就」としての国家の誕生	187
6.1.	はじめに	187
6.1.1.	「想像の共同体」	187
6.1.2.	本章のねらい	188
6.2.	「予言の成就」の予兆	189
6.2.1.	ングンデンの聖なる杖、ダン	189
6.2.2.	2009年5月16日	190
6.2.3.	ングンデン教会、キリスト教教会の反応	193
6.2.4.	ングンデンの子孫からの不満	194
6.2.5.	新聞パイオニアの記事	197
6.3.	「偶然の一致」と「エ・クウォス」	199
6.4.	「旗」の出現	200
6.4.1.	南部スーダンの住民投票	200
6.4.2.	南スーダンの「旗」と予言	200
6.4.3.	想像力の統合	206
6.5.	「クウォスの手」の出現	207
6.5.1.	投票用紙に描かれた「手」	207
6.5.2.	予言の地域的多様性	210
6.5.3.	想像力の運動	211
6.5.4.	「成就」の物語とプロット	212
6.6.	「エ・クウォス」と人類学者の想像力	213
6.6.1.	闖入者の想像力	213
6.6.2.	住民投票目前の「予言者の娘」の到来	213
6.7.	小括——統合される想像力と新たなモラル・コミュニティ	220
第7章	「エ・クウォス」をめぐる真と偽	223
7.1.	はじめに	223
7.2.	独立後の武力衝突	224
7.2.1.	第二次スーダン内戦以降の武力衝突	224
7.2.2.	「誘拐」にみるレイディングの変化と持続	228
7.3.	「ホワイト・アーミー」	230

7.3.1.	「ホワイト・アーミー」とは	230
7.3.2.	「ホワイト・アーミー」の歴史	230
7.3.3.	構造と組織化	232
7.3.4.	新しいシステムの流用	233
7.4.	自称予言者の出現	234
7.4.1.	ダック・クウェスの「奇跡」	234
7.4.2.	多様な「自称予言者」たち	236
7.5.	「クウォスはいる」	239
7.5.1.	高まるボー・タウンの緊張	239
7.5.2.	「クウォスはいる」と語られる場	240
7.6.	再び見出される「敵」とのつながり	242
7.6.1.	レイディングと神話	242
7.6.2.	村落部の年配者が語る予言とムルレ	244
7.6.3.	若者、インテレクチュアルが語る予言とムルレ	249
7.6.4.	2つの語りのレトリックと「受け入れ可能性」	251
7.7.	モラル・コミュニティ間のアンタゴニズム	252
7.7.1.	ダックは「クジュール」か、「予言者」か	252
7.7.2.	「ホワイト・アーミー」の襲撃とダック	253
7.7.3.	「ホワイト・アーミー」からの E メール	254
7.7.4.	ングンデン教会の人びとからみたダック	256
7.7.5.	揺らぐダックへのまなざし——武装解除と政府への不満	258
7.8.	「人間のことばを話す者」は誰か	262
7.8.1.	モラル・コミュニティの拮抗	262
7.8.2.	ルイッチ・ナース	262
7.8.3.	ンゴット関係の希求	263
7.8.4.	「エ・クウォス」、ルイッチ・ナース、想像力	265
7.9.	小括——新たな存在の可能性へ	266
第 8 章	結論	269
8.1.	これまでの議論のまとめ	269
8.2.	想像力、プレクルージョンと「エ・クウォス」	274
8.3.	拡張する想像力	276
8.4.	展望と課題	277
	謝辞	279
	参考文献	281
付録	1. ボー・タウン内の宗教関連施設・宗派	303

2. アヨッド・タウンのマーケットについて	304
3. アヨッド・タウン、IDP キャンプの食糧事情	305
4. ボー・タウンの食糧事情	307
5. ある年配者と若者のングンデンの「予言」に関する対話	308

図表・写真・資料番号一覧

表

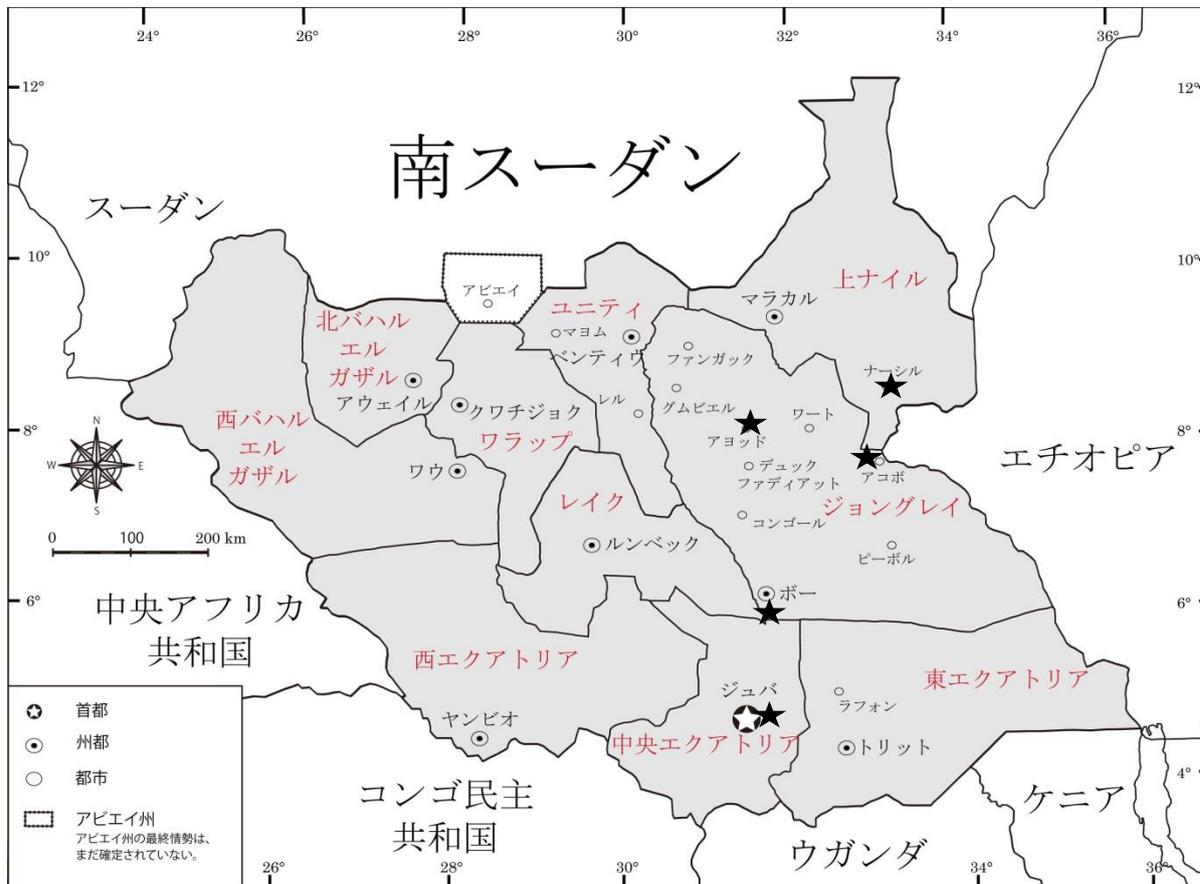
表 1-1	各調査地の人口および降雨量	27
表 2-1	ナイル地方を担当したイギリス人行政官と統治の特徴	41
表 3-1	第一次内戦の開始～第二次内戦終結までの略年表	65
表 5-1	各地のングンデン教会の特徴	146
表 5-2	ングンデン教会の成員の名称と役割	148
表 5-3	ングンデン教会の祈りの進行	152
表 5-4	2012年1月から3月の間に「報告」で語られた悩み	153
表 7-1	2009年から2013年までにジョングレイ州で発生した武力衝突	227

写真

写真 2-1	懲罰パトロールの様子(1917年)	40
写真 2-2	ウィリス夫妻(1926-32年)	44
写真 4-1	ウシの競りに集まる人びと	98
写真 4-2	競りを行う競売人	98
写真 4-3	IDP キャンプの様子	106
写真 5-1	「死霊の妻」という愛称で呼ばれる携帯電話	141
写真 5-2	街中の音楽売り	141
写真 5-3	Tシャツに印刷されたングンデンの塚	142
写真 5-4	ングンデン教会に飾られる「ングンデンの写真」	142
写真 5-5	ボーのングンデン教会	144
写真 5-6	ジュバのングンデン教会	144
写真 5-7	クアール・ムオン風の格好をしたングンデン教会の祭司	144
写真 5-8	家の敷地内に作られたビエを模した泥の山	181
写真 6-1	南スーダンの国旗とングンデンのビエの絵	201
写真 6-2	投票用紙	208
写真 6-3	祝賀会におけるマチャールとングンデンのダン	216
写真 7-1	政府、国連に対するロウ・ヌエル・ユースによるデモ	260
写真 7-2	デモの際に掲げられた「紙」	261
写真 7-3	聖なるコームに座るングンデンに祈りを捧げる様子	267

図		
図 1-1	ヌエルの近隣集団とサブ・グループ	24
図 4-1	「食べ物」の交換と関係形成	112
図 4-2	ある親族内の成員が共有する父系の祖先	115
図 4-3	「血」の穢れを解消する際の都市・村落間の関係	121
図 4-4	チエン・クアスにおける部屋、炉の分配	123
図 5-1	ポーのングンデン教会の構造	149
図 5-2	ジュバのングンデン教会の構造	149
図 5-3	誰の疾病か	154
図 5-4	誰の旅路か	154
資料		
資料 1-1	ある年配者に対する聞き取りの様子	5
資料 1-2	30代男性が語った予言	6
資料 5-1	時に関する表現	172
資料 6-1	ングンデンの子孫らによって提出された声明文	195
資料 6-2	1980年代に知られていた「旗」の予言の歌	201
資料 6-3	「ングンデン聖書」に書かれた「旗」の予言の歌	202

南スーダンの地図と調査地



出典：“South Sudan-Reference map” (United Nations Office for Coordination of Humanitarian Affairs, 26 September 2011)をもとに筆者作成

★印は調査地(ジュバ、ボ、ナール、アコボ、アヨッド)を指す。

第1章 序論

北東アフリカのスーダン地域で勃発した第一次・第二次内戦(1955-1972;1983-2005)やその後の戦後復興の過程において、ヌエル(Nuer)社会の予言者や予言に関する噂は、民族集団の境界を越えて広く流通し、多くの人びとの言動に影響を与えてきた。1世紀以上前に存在していた予言者によってなされた予言は、内戦、国家の独立、その後の凄惨な紛争といったさまざまな出来事とともに語られ、現在の多様な背景をもつヌエルの人びとが自らの新しい経験を捉え直す方法と密接に関わってきた。

本論の目的は、南スーダンのヌエル社会の予言をめぐる信念が、歴史の中で交錯してきた複数の想像力とともに生成されてきた過程を明らかにするとともに、語り継がれてきた予言と出来事とが、人びとが新しい状況を捉え直す方法とどのように関わりあってきたのかについて検討することにある。具体的には、ヌエルの予言者の歴史的生成過程を明らかにするとともに、社会変化を経ても人々に重視される「ヌエルの秩序」と予言との関係、そして出来事と人々の予言の語りの変位について考察する。

これまでのアフリカ諸社会における宗教実践と社会変動に関する先行研究において、予言や神話は当該社会の人びとのモラル・コミュニティを形成するものと捉えられてきた。これらのアプローチの問題点は、端的に言えば、予言を当該社会の静態的・閉鎖的な世界観の問題とするか、アフリカの「近代」の現れの一つとすることで、伝統／近代モデルのどちらかに当該社会の「変化」と宗教的実践の関係を還元して捉える傾向にあった。こうした先行研究の問題点に対して本論が参照したのは、東アフリカ社会の詳細な儀礼・民話研究を行った T.O.バイデルマンが用いた、対象社会にかかわる者すべてに双方向的に作用する想像力／モラル・イマジネーション(moral imagination)という観点である。本論では、この想像力という概念が既存のモラル・コミュニティ論が有していた限界を乗り越える視座を提供するものとし、課題として以下の3点を設定した。(1)対象社会の人びとに限らない複数の想像力が、いかにヌエルの「予言者」の成立に関わってきたのかを明らかにすること、(2)ヌエルの人びとが新しい状況や他者に出会った時、それを自分たちの経験として想像する方法を明らかにすると共に、この方法と予言とが、新しい経験を相互に生成してゆく過程を捉えること、(3)ある出来事に対して人びとが「腑におちる」経験——ヌエルの人々が「それは神である／エ・クウォス」と表現する瞬間——と想像力がいかに予言の「成就」を作ってゆくのかを検討することである。

本論の構成

本論はⅢ部 8章構成である。第1章では、アフリカ諸社会における宗教的実践と社会変動に関する先行研究を概況し、本論の視座を据えた。第Ⅰ部(2章、3章)では、文書館史料と文献調査を通じて、ヌエルの予言者の歴史的生成過程を検討した。第Ⅱ部(4章、5章)では、都市部・村落部・国内避難民キャンプで得られた資料をもとに、ヌエルの人びとが第二次ス

ーダン内戦後に直面した新しい状況と、予言者を祀った「教会」に集う人びとの予言の経験との関係を検討した。第Ⅲ部(6章、7章)では、筆者のフィールドワーク中に生じたさまざまな予言的出来事の中で、多様な背景を持つヌエルの人びとがそれらをどう語り、周囲の人間と議論・吟味し、自らの経験として位置付けてゆくのかを検討した。そして第8章では結論と残された課題を提示した。

第Ⅰ部 予言者の歴史的生成過程

課題(1)に対して、本論の第Ⅰ部では、ヌエルの「予言者」が植民地期以降のスーダン地域のさまざまな勢力の想像力に翻弄され、またその想像力の中で形作られてきた側面を検討した。

第2章「クジュール／予言者の成立」では、ヌエル社会の統治を担当した英国人行政官の書簡と歴史資料を手がかりとして、イギリス植民地期にヌエルの予言者の性格が行政官の想像力と共にどのように成型されていったのかを明らかにした。具体的には、その行政官が、当時の植民地行政に共有されていた「アフリカの宗教的指導者」、あるいはかつてイギリス-エジプト連合軍に壊滅的な被害をもたらしたマフディーのイメージをどう統治のプロジェクトに利用していったのか、そのプロセスを描いた。

第3章「内戦、予言者、予言」では、第一次・第二次スーダン内戦期に、ヌエルの予言者が人々を紛争へと動員する際どのように利用され、また紛争経験を理解するすべとなったのかを明らかにした。具体的には、ヌエルの予言者の「伝統的」素質が強調され、紛争中にさまざまな勢力に利用された側面と、予言者を紛争に利用しようとした諸勢力の想定とずれてゆく予言のリアリティのあり方をそれぞれ明らかにした。

以上を通じて、第Ⅰ部では、ヌエルの予言者の力や性格を付与してきたのは、歴史の中で拮抗・衝突してきた複数の想像力であり、一方で、予言は必ずしも予言者を支えているわけではなく、予言者に対する周囲の勢力の想像力を越えて出来事に新たな意味を与えながら流動し、拡大してゆくものであることを明らかにした。

第Ⅱ部 経験の配位

課題(2)に対して、第Ⅱ部では、多様な状況の下で暮らすヌエルの人びとの日常実践の場から、社会変容の場面において、人びとが新しい状況や他者との出会いをどのように想像し、予言の解釈を通して位置づけてゆくのかを追った。

第4章「多産と時間」では、社会変化を経ても人びとに参照され続ける「原理」、あるいは「ヌエルの秩序」の在り方を明らかにした。具体的には、ウシの喪失、食糧不足、都市化に伴うインセストや「血」の穢れの発生といった新しい状況に直面した際、多様な背景を持つヌエルの人びとがどのようなイデオロムや実践を通じてそれらの困難を乗り越えようとしていったのかを追った。

第5章「不妊と予言」では、予言者を祀った「教会」に集う人びとの実践や予言者への祈

りを事例として、「教会」に集う人びとが過去の予言の中にどのように自分たちの現在の経験を見出しているのかを明らかにした。具体的には、予言者「教会」が成立した背景と実践を紹介し、どのような経験と予言とがともに語られ、特定の対話方法やイディオムを通じて表現されているのかを追った。

以上を通じて、第Ⅱ部では、現代の多様な背景の中に生きるヌエルの人びとが自分の経験を位置づけるために参照してきた方法の中でも重要なのは、不滅的な自己、あるいは多産性を確保すること、そして自分たちの直面している苦境との関係を明確化してくれるのが予言であり、だからこそ予言の経験は人びとの「腑に落ちる」ような「真実」の経験を与えるものとしてあることを明らかにした。

第Ⅲ部 「エ・クウォス」の変動

課題(3)に対して、第Ⅲ部では、国家の独立やその後の紛争という出来事の中で、人びとに大きな驚きと確信をもたらす予言と現実との「偶然の一致」——人びとが「エ・クウォス」と表現する時——が複数の想像力の間を行き来し、予言の「成就」を作り上げてゆく過程を考察した。

第5章『『予言の成就』としての国家の誕生』では、国家の誕生とそれ際語られた「予言の成就」のあり方を事例として、ある複数の出来事が、予言や「エ・クウォス」という表現を通じていかに関連付けられてゆくのかを明らかにした。具体的には、住民投票前の予言者の聖なる杖の登場、住民投票のプロセス、そして投票結果という一連の出来事の中に、「偶然の一致」つまり「予言の成就」の要素が見出されてゆく様を追った。

第6章『『エ・クウォス』をめぐる真と偽』では、ある「奇跡」の力を持つとみなされた男が、疑いの目を向けられながらも、人びとが直面する危機的な状況との関係の中で徐々に「予言者」として浮上してくる過程を明らかにした。具体的には、国家の独立以後生じた紛争における「予言者」の動きを微視的に追い、またその人物に対する人々の評価を取り上げることで、「エ・クウォス」の経験は、個人と集団の想像力の統合・分離をひきおこすエージェントとなり、新たなモラル・コミュニティの生成や対立の一つのきっかけとなったことを指摘した。

以上を通して、第Ⅲ部では、予言や予言者に懐疑的な者までをも予言への信念へと向かわせる契機となったのは、多くの人びとに「エ・クウォス」と言わせるような予言的出来事の出現であったことを明らかにした。この「エ・クウォス」はさまざまな位相の出来事と接続されることで、個々人にとって、あるいは彼らが意識する流動的なモラル・コミュニティにとってより説得的なものとなり、またその両方の経験を共に把握することを可能にしていた。

結論と課題

本論を通じて、ヌエルの予言者がスーダン地域の歴史の中で展開してきた複数の想像力

の中でその性格を付与され、また「エ・クウォス」と表現される予言的出来事の発生と共に予言が探られると同時に、人びとが自分たちの経験を捉え直す方法と予言とが不可分に結びついてきたことを明らかにした。ヌエルの予言は、歴史や日常生活の中で醸成された双方向的に働く想像力の中で生まれ、時としてそれへの対立・共感を引き起こしながらも、人々に新しい生のヴィジョンやヴァージョンを与えるものであった。複数のモラル・コミュニティの間で緊張関係が常に生じている現在、その論理や実践の貸し借りや衝突、補完などが常に生じている。本論で取り上げた、双方向的に作用する想像力という観点は、ヌエルの予言やアフリカの宗教的实践に限らず、現在生じているさまざまな問題系と共に発展させることのできる概念である。この点を理論的検討と共に深化してゆくことが今後の課題として残されている。